



お茶を飲みながら、
ぎのわんの歴史を
のぞいてみませんか？

ウマチーの「ンマザン(藁算)」

沖縄での米の収穫時期は、おおむね現在の6〜7月頃で、旧暦6月15日には収穫祭の「六月御祭」が行われます。

宜野湾は戦前までは広大な農地を持つ純農村であったため、農作物に関わる祭りは重要視されていたものと思われます。稲の収穫を感謝する「六月御祭」は、首里王府が編纂し1713年に成立した地誌『琉球国由来記』では「稲大祭」とあり、文字通り大きな祭りとして認識されていたようです。



▲俵の計算を表す藁算の例



▲人口を表す藁算の例

その「六月御祭」に、戦前（大正・昭和初期）の喜友名では、神酒やゆで卵を喜友名グスクや普天満宮にお供えて集落の住民の健康と繁盛を祈願しました。その際、藁で「ンマザン(藁算)集落の人口数を表したものを」を作り、奉納したそうです（『宜野湾市史第五巻 民俗』381頁）。

喜友名の事例では藁算で集落の人口数を表現していますが、他の地方でも、租税の徴収記録、人員点検等、多くの用途に使用されていました。しかし、近代以降、文字の使用が一般化し普及すると、祈願の用途以外は急速に廃れていったとされます。

喜友名のように、近代になってからも重要な祭りの際に使用されたことを考えますと、藁算は、文字とは異なる、大切な神への意思伝達具・記録媒体と見なされていたため、祈願の用途では比較的長く使用されたと推測することが可能かもしれません。

問 市立博物館 ☎870-9317



「思い出」が「お宝」に!?

市内にあった「映画館」の

情報を探しています

皆さんは「映画(館)」と聞いて何を思い浮かべますか? 「ピー」と鳴って館内が暗くなる場面でしょうか? それとも、好きな映画のワンシーン? 思い浮かぶ情景は人それぞれだと思いますが、今も昔も、誰かの心にハラハラドキドキを与え、時には心に寄り添い、時には鼓舞させるのが映画の魅力だと思えます。そんな映画ですが、一昔前の人々にとって数少ない娯楽の一つでした。1950〜60年代の宜野湾市にも、多い時には5つの映画館（「普天間沖映館」「普天間琉映館」「ブランドパレス」「スカラ座(普天間オリオン座)」「開放地琉映館」）がありました。テレビの普及によって街の映画館は閉館していききました。

しかし、映画館は閉館しても、今でも建物だけが残っている場所がいくつかあります。写真(上段)に写る建物はその中の一つですが、皆さん、お分かりでしょうか? ここは、普天満宮の向かいにある建物で「普天間琉映館」の現在の様子です。そして、下段の写真が1960年代の様子です。入口あたりに面影がしっかりと残っています。

す。あの頃の記憶がよみがえった方や「まさかあの建物が映画館だったなんて!!」と思った方もいらっしゃるかもしれません。

このように、今と昔の様子をお伝えすることが出来る資料はとても貴重なもので、後世に伝えていくためには無くてはならないものです。現在、市立博物館では「宜野湾市内にあった映画館」に関する資料や情報の収集を行っております。写真やキップ、チラシ、映画館に関するお話など、みなさんのお宅に眠っている資料が「お宝」になるかもしれません。お持ちの方は、ぜひ、市立博物館へご提供ください! (お借りした資料は、「ピー」したのちに必ずお返しいたします) お宝にお目にかかれる日を、お待ちしております ★

問 市立博物館 ☎870-9317



▶ 普天満宮の向かいに立っている黄色い建物が、以前の「普天間琉映館」です。(2024年)



▶ 手前に普天満宮の鳥居が見えます。(1960年代)